ともだちが来た

鈴江俊郎

登場人物
友
私

第一場　ともだちを待つ。

セミの声。男（私）が夏の部屋着姿で床にはいつくばっている。一生懸命床の面を見ている。

私　畳のメを、見ている。ほこりが……見える。……ほこり。……ほこり。

指の先にそのほこりをくっつけて拾い、見る。

私　畳のくず……くず、か。

ほこりを床にていねいに置く。背を伸ばし、虚空を見つめる。耳を澄ましているのだ。セミの声が聞こえる。

と、視界の隅に何かはいったらしい。床の上のある一点に近づく。その一点はゆっくりと動くらしい。

私　ありだ。

そのありに顔を近付けたまま、動くにつれて一緒に身体を移動させる。指をそのありの進む先に据える。ありは指の上に乗ったようだ。

私　ありは、

さっきのほこりを置いた位置にありを下ろす。

私　ほこりを食べるだろうか。

じっと見ている。

私　ほこりを食べるあり。

ありはほこりには頓着しないで移動してゆくようだ。それを見送る。

見送る視線はいつの間にか、漠然と畳のメを見ている。

床の上のウチワを取り上げてその姿勢のまま二・三回あおぐ。

音が聞こえる、ようだ。

背を伸ばし、先程とは違う方角の虚空を見つめる。セミの声が聞こえるばかりだ。

しかしそのセミの声はいつしか意識から遠のいてゆく。頭の中には不可思議な水中をあぶくがのぼっていくような音が響いている。

私　音が聞こえる、水……水。……水の音だ。

立上がり、音源を探す。静かな音。油断しないように静かに身体を動かしている限り、その音は消えはしない。

音は、消えたようだ。先ほどのありがふたたび視界に入った瞬間に。

私　暑いな。

ウチワで自分に風を送る。ありを見つめたままだ。

私　暑い。

だるい。座り込む。視線はありを追う。

私　ほこりを食べないあり。

ウチワをあおぐ手を止める。耳を澄ます。音は静かに頭の中に響き始める。不快になり、ウチワで風をあおいでみる。
音は、しかし、先ほどと違って消えない。消えないのだ。
ウチワを止めて、じっと耐える。音のリズムは一定だが、その脈動は確かさを増してしまった。音を消そう、とありを探す。探す。見つける。見てみる。

私　ほこりを食べないあり。

少し気合いを入れて見つめてみた。しかし、音は消えない。
焦る。しかし、耐えるしかない。
床に置いた指先で畳のメをひっかいてみる。
不規則に、ゆっくりと、しかし音は消えない。
音が消えるどころか、ひっかく爪の音がむしろ水の音に加わって脈動をより確かなリズムに変えてしまった。
その脈動を崩そう、と不規則にひっかいてみる。強く、弱く、早く、遅く。しかし、すべての爪の音は頭の中に強く響くばかりだ。

私　あー、うるさい。

ウチワで強くあおいでみる。姿勢も大きく変えてみる。座り直して虚空を見上げてみたりする。
音は消えないのだ。
ウチワであおぐ音まで頭の中に増幅されてしまう。

私　あー。や・め・て・く・れ・

ウチワで自分の声をあおいでみる。あおいだ声も同じ結果。

私　あー。

逃れようもない。立ってみる。自分でなく、空気をあおいでみる。だめだ。

私　あー。

空気をあおぎながら自分の手足を適当に空気の中でひるがえしてみる。音は空気の波動なのだ。その波動を否定しなければならないのだ。
しばらく、その空気の中で泳ぐ自分の身体が心地よくなるほどに動いてしまう。その身体の動く音も耳についてしまった。動くのもやめる。激しい脈動は去る。

私　中耳炎かな。

決して本気で思った言葉ではない。という言葉も相変わらず響く。静かに、脈動は続いていた。
頭をふってみる。甲斐がないとは知りながら。
そして、あきらめる。
ありを見る。じっと見ている。
うちわで自分をあおぐ。汗をかいてしまった。

私　ほこりを、

うちわで声をあおいでみる。

私　ほこりを食べないあり。

うちわで声があおがれる感覚が楽しくて、口を開けたまま、うちわで風を送る。
暗転。

第二場　ともだちがきた。

明るくなると、座っている私の横にもう一人、男（友）が立っている。自転車を支えながら、汗をかいている。
年格好は私と同じくらいか。
自転車はまちなかを普通に走っているタイプの、いわゆるママチャリ。ついさっきまで自転車をこいでいた、という様子だ。

私　おう。
友　おう。
私　よく来たなあ。
友　おう。

友、私のうちわを取り、立ったままあおぐ。

私　座れよ。
友　おう。

立ったまま、うちわをあおぐ友。

私　……。
友　ん。

私に、自転車を支えておいてくれ、と示す友。
私、立って自転車を持つ。

友　あーあつい。
私　一週間か。
友　おう。
私　なんで今頃なのか、よくわからないよ。
友　そりゃそうだ。

友、自転車から自由になったので歩きまわっている。
歩いて風を作るのだ。私、自転車を眺めて、

友　でもほら、夏休みだから。
私　え。
友　理由になってない。
私　うん。
友　なあ。
私　……よくやるなあ。
友　おう。
私　ずっと野宿か。
友　おう。
私　こんなので一週間も走るか。
友　うー。暑い。
私　……。
友　不思議だろ。
私　おい。

友、うちわを猛烈にあおぐ。白い歯が見えた。
あおいだ風のせいばかりではなく、涼しそうだ。

私　おい。
友　はい。
私　靴。
友　え。
私　靴、脱げよ。畳だぞ。

友、不思議なことを言うのをとがめるように私を見て、

友　あれは何の木。
私　え。
友　庭のまんなかの。
私　どれ。

友、うちわをあおいで庭らしい方向を見ている。

私　かきだよ。
友　へー。

私、自転車のスタンドを立てる。

友　あんまり長くはいないよ。
私　そう。

友　わかるだろ。
私　ああ。……
私、考える。考えがまとまらない。ウチワを友から奪う。
私　いや、よくわからないけど。
友　そう。
私　……どうして、靴、脱がないんだよ。
友　え。
私　どうして。
友　べつに。
私　なに。
友　どっちでもいいじゃないか。
私　なに。
友　いや、ま。
私　……なに。
友　どっちでもいい。…よ。どっちでも。
私　……。
友、自転車のタイヤを見ている。
友　夏休み、どうしてる。
私　実家に帰って、とくには別に、
友　うん。
私　ぶらぶら。
友　楽しいか。
私　楽しくないよ。とくに、別に。ぶらぶら。一回生だし。
友　どういうこと。
私　いや、どういうことだ。
友　さあ。…下宿、楽しいか。
私　うん。まあまあ。
友　嘘つけ。楽しいんだろ。
私　うそじゃないよ。まあまあだよ。一回生だし。
友　どういうこと。
私　……。
友、靴を脱ぐ。
友　ま、いいか。
友、靴を持って去りかける。
私　どうして。
友　理由なんて、ないよ。
私は、語気が荒くなってしまった。二人は気まずくなる。
私は後悔してしまった。しかし取り返しもつかない。友も困った。
友　これ、どこに置いてこようか。
私　……玄関だろ。
友、照れたような笑顔を残して、去る。私、それを見送る。
私、うちわであおぎながら、
私　どうして自転車なんかで来るのか。
自転車を見る。
私　五百キロ？八百キロ？いや、もっとか。東京から大阪までが五百キロだから…いや、八百キロくらいか、…何キロだ？
私、自転車に風を送る。
私　関係ないのか。
友、手ぶらで戻って来る。
友　自転車はいいのか。
私　なに。
友　自転車。
私　いいだろ。当たり前だろ。
友　でも靴は玄関に。
私　どうしてだよ。
私、またしても語気が荒くなってしまった。苛立ち、焦る理由が自分でもわからない。どうして「自転車はいい」のかもわからない。
友、その手からうちわを取る。あおぐ。
友　困ったな。

私　……。

友　六百二十キロ、くらい。

私　……そうか。

かえって私が気を遣ってしまうような友の笑顔。

私は恥ずかしくなってしまった。

暗転。

第三場　ともだちは寝る。

明るくなると、友は寝ている。私は座って、うちわで自分をあおいでいる。

私　柿の木なあ、実がつかないんだよ。

友をみる。反応はない。

私　ここしばらくな、実がつかないんだよ。

友を見ない。どうせ反応はない。

私　どうしてだかなあ、去年も一昨年もだよ。

私、うちわであおぐ。少し涼しい。

友、寝返りを打つ。

私、反応を少し期待して、

私　今年もつかないよ、きっと。

友、反応はない。

私、ウチワで友に風を送ってやる。

反応はない。

私、うちわであおぐのをやめる。

私　理由はわからないんだけどな。

反応がない。私、自分に風を送り始める。

柿の木を見て、

私　死んだんだろうか。なあ。柿の木が。柿の木が死ぬっていうのは、……死ぬんだろうなあ、やっぱり。……いつ死んだんだろうか。がくっ、て死ぬはずはないもんなあ。立ってるなあ。立ってるけど、死んでるのか。死んでも立ったままだなあ。死んでも死んでなくても柿の木は同じように立つんだなあ。

私、うちわの手を止めて友を見る。反応はない。

私　よく寝るなあ。

私、うちわで自分をあおぐ。

柿の木を見上げている。

死んでるのか、死んでないのかよくわからない柿の木。

暗転。

第四場　ともだちは茶を飲まない。

明るくなると、コップにはいった麦茶を手にして立っている私。友はそれを見ている。

私　俺、お前がきてくれてうれしいよ。

友はみている。私は座る。

私　のむだろ。

友、コップを取り、むしゃぶりつくように、飲みかける。
しかし、やめる。コップを調べるように見つめている。

私　なんだよ。
友　いや。
私　なんだよ。毒でも入ってるのかよ。

私、コップを奪い、一息に飲み干してしまう。

友　気持ち悪いんだよ。人の腹の中に入るってことが。
私　なに。
友　ぺったんこの身体の中に、水やら食い物やらが飲みこまれていく。
私　……。
友　飲みこまれてしまった水やら食い物はぺったんこの身体のどこにいってしまうんだろうね。

友、コップを私から取る。

友　自転車で海を走ると、安心するよ。川を走ってもそうだ。安心する。俺はここにいないんだなあ、って快感。世の中を捨てたんだぞ、っていう異和感。解放感。か。モノがまったいらに見えるよ。風景がまったいら。お前の手も、足も、まったいらだよ。ほら。

友、私の手、足、顔を順々に触る。

友　気持ちいいか。
私　……いいよ。
友　おれはわからないんだよ。

友、私を見る。

友　触ってる俺の手も、足も、まったいらなんだ。

友、自分の手、足を触ってゆく。相手の手足とまるで区別がないようだ。
私は見ていると、下腹部が熱くなるような官能の感覚がこみあげてしまった。
耐えきれない。立つ。去る。

友、一人残る。自分の手、足を触っている。
試すように探るように。うぶ毛がすべて逆立つような皮膚の触られ具合。うぶ毛をすべて逆立てさせようとする手の加虐の具合。
その両者を味わう友は決して楽しんではいない。

私、現れる。第四場の冒頭のように手に麦茶の入ったコップを持って立つ。

私　俺、お前がきてくれてうれしいよ。

友はみている。

私　お前の葬式の時、お前のねえちゃん、見たよ。始めて、見た。きれいな人だったなあ。びっくりした。ちっとも泣いてない。俺も、ちっとも泣けなかった。味気ないよな。ああいう寺の葬式は。墓こしらえてもうけてる新築のコンクリート造りなんだから。
友　わけわからないお菓子の盛り合せなんか飾ってあって。
私　あったよ。わけわからない安物のお菓子、盛り合わせ。なにあれ。
友　さあ。
私　お経だよ。
友　ああ。
私　お経。な。
友　しかたないよ。はじめてか。
私　うん。はじめて聞いた。おっかしい。笑いそうになる。
友　うちは真宗だから。
私　浄土真宗ってのは明るいねえ。
友　……。
私　ねえちゃんはきれいだし、気になるし。ちゃんと泣きたかった。
友　いいじゃないか。
私　そうはいかない。
友　いいじゃないか、どっちでも。
私　だから、なんか、ちゃんと話ししよう。…

…楽しい話。しみじみした話。

友　……このたびは、ほんとうに、わざわざぼくのために、

私　生前の折りにはひとかたならぬお世話になりまして、

友　お世話していただいたのは一方的に私のほうばかりでして面目ない、

私　いえいえなにをおっしゃいます、その言葉そのままそちらにお返しさせていただいて、

友　ありがとう。

私　……俺、お前がきてくれて嬉しいんだよ。

友　ありがとう。

私、不覚にも涙をこぼしそうになってしまった。

照れて、いや、それを隠して、

私　飲むか。

友　……

私　飲むだろ。

友、まっすぐ私の目を見ている。

私、照れた。どうしようもない。真剣な表情で、立ち上がる。

私　いやあっ。

私、素手で剣道の真似をして友に面を打ち込む。

友、それをとっさに素手の竹刀で払う。立つ。

二人、真剣な試合になる。

友　とわおーっ。

私　いきえーい。

なかなかしかけない二人。どちらか一方が動けば一気に崩れてしまう緊張が走る。

仕掛けたのがどちらかわからないうちあいがある。鋭い踏み込み、血走る目。重さと軽さの混じったような均衡のあげく、きれいに私の面打ちが友にはいったようだ。

私　面っ！

緊張の糸が切れた二人。友、敗れた気だるさのまま、うつろに床を見ている。息ははずんでいる。

友　強くなった。

私　え。

友　俺は、高校の頃にはもう勝てなかった。

私　ああ。

友、私のほうを向き直り、試合が済んだ後の礼をする。

友　小さい頃のことを思い出すよ。一緒に始めた頃はおまえ、弱くて。俺、握りが堅い、って、教えてると、おまえ、泣いた。泣いたらおでこのホクロが赤くなった。ホクロ、どうした。

私　あるよ。大きくなって、目立たなくなっただけ。

友　……。負けたら、部室で、鏡を見る。俺はホクロ一つない。ほっぺもつやつやだ。いろっぽいな、って思う。じりじりと鏡から離れたくなる。でも離れていくのは俺じゃなくて、おまえらだ。そう思った。な。いろっぽいほっぺだろう。

私　……

友　友だちのいないほっぺだよ。

私　いろっぽくないよ。

友　楽しかったろう。

私　……。

友、礼のうつむいた姿勢のまま、泣く。

私　飲むか。

友　……。

私　飲めよ。

私、勝者の冷徹さで友に対してしまう。それはやはり仕方ない。勝ってしまう者は負けてしまう者にどんないたわりをかけてやれる資格も持たないのだから。

暗転。

第五場　ともだちは見ている。

明るくなると、私が一人立っている。腕いっぱいになにやら抱えているようなパントマイムをする。
後ろをふりかえる。後ろにはだれもいないが、だれかがいるかのような一人芝居だ。

私　入れよ。

手に持っていたらしい荷物を足元に置く。
振り返り、

私　なんだよ。ごめんください、はないだろ。部室なんだから。ごめんください……ごめんください、だって。

部室は様々な道具が床やら棚やらに乱雑に置いてあって、ちらかっているらしい。その一つ一つをけっとばしたり手で動かしたりして、足の踏み場を広げている。

私　だれもいない？そうだよ。今稽古してるから。部員は皆、剣道場。狭い？

一つ、道具を高い所に片づけて、相手をにらむ。

私　広いよ。……入れよ。

相手は剣道部の部室らしいその空間にはいったらしい。

私　大丈夫だよ。部員じゃない奴が入ったからってだれも文句なんか言わない。……女人禁制なんかじゃないんだから。女子部員だっているんだから。……女子の部屋は、もちろん違うよ、隣。そこのポスターめくってみろよ、穴が開いているから。隣の部屋、のぞけるだろ。

戸の鍵を後ろ手にしめた。目は真剣に、緊張している。

私　なにって。だから、隣の部屋は女子部員用ですよ、っていう証拠。

片付けてある荷物を床に並べていく。

私　……サイテーでえす。……暗くないよ！

相手が、戸のそばにある電灯のスイッチを点けようとしたらしい。それを手で隠して、妨害する。

私　明るいよ。大丈夫だ。十分見えるよ。な。俺、三年なんだから、文句言う奴なんてないって。防具、並べただろ。

相手は防具を手にとって見始めたらしい。

私　そう。それ。整理しなくちゃならない。俺の当番。手伝ってくれってこと。大変なんだから。

部屋のあちこちに積んである防具を床に並べる作業をする。

私　ほころびてるのは修理して、修理できないのは捨てて。捨てるのは分類して、後でまとめて始末する。……いいだろ。暇なんだろ。女の手でやるほうがなにかと……三年だよ。

手をとめ、にらむ。

私　一年坊主もやるけど、三年坊主もやるんだよ。時々は。不思議な世界なんだって。

相手も不承不承、防具を並べたりし始めたらしい。それを眺めて、自分も作業に取りかかる。
しかししばらくすると手を止め、相手の作業を、いや、身体を見ている。喉が乾く。

私　くさい？アルコールみたい？……汗だよ。酸っぱいのは汗のにおい。

また作業をはじめる。喉は乾く。唾を飲み、目は落ち着かない。手が止まる。相手の身体を眺める。

私　ひろみ……

緊張した。耐えられない。

私　なんでもないよ。

愛想笑いを浮かべてしまう始末。作業を続ける。舌打ちしたりもして。なにか話しかけられた。

私　な、なんでもない。

手が止まる。床を見つめて、緊張する。決心がつかない。
ふがいなさに首を振りかけて、

私　はい。

相手が立ったようだ。見上げる。

私　はい。

相手に促されたようだ。立つ。

私　え。

相手がしがみついてきた。唇を重ねた。というより重ねられてしまった。戸惑う。しかし必死でその背中を抱こうとして、腕がこわばる。唇もこわばる。目を必死でつぶろうとする。
長い生硬なキスが終わったようだ。相手が戸口に動くようだ。

私　うん。皆、剣道場。……うん、帰ってこない。

相手が戻って来た。

私　え。……

相手のセーラー服のファスナーを開けてやるしぐさ。

私　あ、あと、自分でやる。うん。

ただ立って、圧倒されながら、相手が服を脱ぐのをみている。

私　待つよ。

もう一回キスをして、その背を抱いたまま、横になりかける。一生懸命床に並べた防具を手で払いのけたりしながら。

私　鍵は、さっき、かけたから。

着ているシャツをぬいだ、その時、友が入場する。
手に先ほどの麦茶のコップを持っている。私と目が合う。
友はコップの水を飲もうとして、やめる。

友　やめとこ。

私　……。

二人、睨み合ったまま。暗転。

第六場　ともだちは麦茶をかぶる。

明るくなると、私が上半身裸のまま、座っている。コップを握っている友とならんで、うちわをあおいでいる。私の前にも麦茶のコップがある。

友　鍵、かかってなかったんだよ。

私　くそっ。

私、うちわをあおぐ手が止まる。突如頭を抱えこんだ。

私　あーっ。

友、私の手からうちわを取り上げ、自分があおぐ。

友　パンツぬいでなくてよかったよ。もう見てられなかったな、そうなると、きっと。

私　あーっ。

私、友からうちわを奪い返す。

私　意地悪。

友　なに。

私　意地悪だよ。

友　なんで。

私　どうして部室なんか来たんだよ。稽古の最中に。

友　ムシのシラセ。

私　ムシ？

友　なんだかそんな気がした。

私　あーっ。

友　なんのムシだろうね。クワガタムシ、クワムシ、デンデンムシムシ。

私　……

友　あのときだよ、急に。全部ぺったんこになった。

私　え。

友、私からウチワを奪う。ウチワの柄を軸にくるくる手の中で回転させてみる。思い出しているのだ。

友　一瞬、おまえの背中が目の前に迫ってきた。で、いち、にいの、さん、

回しているウチワが畳に落ちた。

友　ぺったんこになった。

落ちたウチワを見つめる二人。

友　へへへ。

友、そのウチワを畳の面で叩いてみる。ぺったん、ぺったん、音が響く。その動きを続けながら、

友　急いで、鏡を見にいった。いろっぽいほっぺがみるみる遠ざかるんだな。離れていく。負けたわけでもない、はずなのに。で、俺の身体も、ほっぺからぺったんこになっちゃった。

私　……。

友　不思議だろ。俺も、不思議だよ。

友、そのウチワの動きを止める。

友　今思うとさあ。

私　……。

友　一回くらい結婚してから死ぬべきだったよなあ。リコンしてもいいから、二日くらいでいい。一緒に暮らしてみる。な。

友、そのウチワの動きを再び始める。

友　死んでも死にきれない。

私　……。

私、そのウチワを取り上げる。ためらいながら、友を見ながら、自分をあおぎ始める。

友　説明してやろうか。

私　……おう。

友、シャツを脱ぐ。それを広げて、自転車のハンドルにひっかける。それを指差しながら、黒板で説明する教師のようだ。

友　へんな奴だと思ってたろう。昔から、友達のいないへんな奴。

私　……おう。

友　こういう奴は友達がいなくても平気なんだろうな、って思ってたろう。

私　……いや、わからな、

友　平気じゃないんですね、これが。へへへ。

私　……。

友、そのシャツを取り上げ、手に持つ。私を見て、

友　知ってたろう、おまえ。

私　……。

友、手にしたシャツをタオルがわりにして自分の身体の汗をふく。ふきながら、

友　大学入って、俺、友だち何人できたと思う。

私　さあ。

友　ゼロだよ、ゼロ。

友、そのシャツを絞る。一生懸命絞る。しかし、水滴は一滴も落ちない。友、滴が落ちないシャツをあきらめて、広げて、見る。

友　受験勉強は助かったよ。皆が同じ方向を向いて、皆が同じように、一人になる。共通の目標だ。無差別だ。戦友だ。俺はうれしくて、毎日ウキウキした。でも大学に入るとそういうのは消える。なくなる。な。

友、私を見つめる。

友　だから今頃なんだよ。

友、私にシャツを投げてよこす。

友　どうだ。

私　どうだ、って。

友　客観的で、よくわかったろう。すばらしい。

私　……。

友　でも、わかったのは、客観的なところだけだ。

友、自転車にまたがりかける。

私　ぎゃっ。

友　え。

私　……

友　なに。

私　なんでもない。

私、友のシャツをていねいにたたみ始める。

友　なんで「ぎゃっ」、なんだよ。

私　突然、困ることがあるから。

友　なに。

私　おれは困ることがあるから。

私、ていねいにたたみ終わる。それを見る。

私　急にありありと、昔のある場面が思い浮かんで、恥ずかしくなって、声を出しそうになる。電車に乗ってる時なんか、もちろんそうだし、一人でいるときでも、困る。今度のも、そうだよ。

友　今度のって。

私　おまえが死んだこと。

友　そう。

私　今はまだ一週間しかたってないからそうでもないけど、きっと、何年かしたら急に思い浮かぶでしょう。離れ離れになって、四か月たった頃だっ……「ぎゃっ」、だ。

友、そのシャツを取り返す。広げる。

私　あるいは、「あー」、だ。

友　どうして「ぎゃっ」、なんだよ。

私　うん。

友、そのシャツを再び着る。私、無言で思い浮かべてみる。
友、私を見る。

私　やっぱり、そうだよ。

友、コップの水をゆっくり私の頭からかける。
静かに、私の頭のてっぺんに流しこむように。
戸惑う私。

私　なに。
友　おまえさあ。
私　なに。
友　あの子とつきあってるの。
私　なに。
友　やったの。
私　やっ……てないとも、やってるとも、

私、自分の身体についた茶を手でぬぐい、なめる。

友　そう。
私　やった。つきあってない。つきあった、けど。
友　部室か。
私　いや、まあ、そう。
友　こりないなあ。
私　次は、ちゃんと、鍵、かけた。
友　いいなあ。

私　とくに、別に、いいことなんか……
友　楽しかったろ。
私　……。

私、茶をひとすすり、飲む。
友、寝っころがってしまう。

友　俺のと、あの子のと、どっちがいろっぽい。
私　なに。
友　ほっぺだよ。
私　……。
友　俺のほっぺなんか、泣くとさらにいろっぽいぜ。
私　……。
友　俺なんか、童貞で、死んでしまった。

私、茶をひとすすり、飲む。友、寝返りを打つ。間。

私　おい。
友　……
私　寝るのか。
友　……
私　寝るのか、また。
友　……
私　よく寝るなあ。
友　……

私、庭の柿の木を見上げる。

私　あの柿の木は全く、生きてるんだか、死んでるんだか。
友　ありんこは、
私　え。
友　ありんこは、ほこりを、食べるだろうか。
私　え。
友　ほら。

私、友が寝そべって見ている畳の上の一点をのぞきこむ。

友　ほこりだよ、な。で、ありんこ。
私　さっきのだ。
友　なに。
私　いや。
友　……。

二人でありとほこりを見ている。

私　食べるのかもしれない。ほこりを運ぼうとしている。
友　ありも、ぺったんこだ。

友、そのありを拾いあげる。

友　……しかし。

そして、ありが腕をはうのを私に見せながら、

友　なにを確かめたくて、俺は死んでしまったんだろうか、ねえ。

私、友を見つめる。友、私の腕にありを渡してやる。そして、立つ。去る。
一人残され、腕の上のありを見つめる私。
ＯＦＦから、友の声。「麦茶、いれるよ。」
腕の上のありを見つめる私。

私　あ。

虚ろな視線になる。畳をひっかく。

私　音だ。水の音が、聞こえる。

畳をひっかく私。暗転。

第七場　ともだちは走る。

明るくなると、友が自転車に乗って、ゆっくり円を描いて走っている。座ってみている私。時々ゆっくりすぎて友がふらつくと手を出してやろうとしたりする。

友　わけわからないよ。なんで自転車なんだろう。

私　さあ。

友　走ってきたんだ。本当に。いろんなところを走った。峠を越えて、トンネルを抜けて、国道は車が多くて、疲れたりもした。パン屋で牛乳買って飲んだり、

私　一週間……だから。

友　ちゃんと野宿もしたんだ。山が湖に落ちこんだ崖の下に大きな化け物みたいな松が生えてて、その下で寝た。夏だからこのまま寝た。雨が降った。夜の湖はこわいぜ、まっ暗で。深くて、怖いぜ。大きなクモがいた。そこでこのまま、寝る。あ。

私　なに。

友　風呂、入らせてくれよ。

私　なに。

友　風呂。入ってないし、一週間。

友、自転車をとめる。

私　やめとこう。

友　どうして。

私　やめとこうや。

友　どうして。

私　だって……気持ち悪い。へんだ。

友　そうかなあ。

私　だって……おかしい。

友　……そりゃ、そうか。

友、自転車をこぎ始める。

友　楽しいことないかなあ。

私　うん。

友　なんか、楽しいことしたいなあ。

私　うん。……海、行こうか。

友　海。

私　ここから近いし、ほら。

友　海か……。

私　うん。

友　やめとこう。

私　どうして。

友　だって、俺、最後、海だったから。

私　あ。

友　飛び込むのは気持ちよかったよ。

私、ブレーキを握って、友の自転車をとめる。

私　なにしに来た。

友　あいさつ。

私　なんの。

友　あいさつだよ。行ってきますって、あいさつ。

私　……うん。

友　茶、飲ませてくれよ。

私、畳の上のコップを取り、渡そうとするが、友はまた自転車をこぎだす。渡せない。

友　海はいいよ。あぶくが水面に上がってゆくのが見えた。きれいだよな。水を飲むとガバッ、と、これがおれの身体の中から出てきた空気かっていうくらいの量。あぶく。

私　そう。

友　肺の形をしてた。ブカブカブカッ、て、身体は沈むのに肺の形はきらきらした水面に向かって進んでゆく。

私、やりきれなくなって、その茶を飲む。ひといきに。

私　苦しかったんだろ。

友、そのコップを奪う。手に持ったまま私のまわりをまわり続ける。

友　そりゃもちろん。

友がまわる中心にいて、友をみながら身体を回転させる私。

暗転。

第八場　ともだちは勝つ。

明るくなると、友が空のコップを持って、麦茶の入ったコップを持っている私と向かい合って立っている。

私　大学でまた、剣道やってるんだよ。

友　知ってるよ。

私　飲んだら。

友　うん。

友、座る。柿の木をみている。

私　上には上がいる。俺なんか全くの稽古台。有段者がぞろぞろいる。嫌味なんだ。防具のないところをわざと狙って打つ。防げない。痛い。腹が立つ。

友　うん。

私　女でも強いのがいるんだ。そいつがまた性格悪くて、肘とか脇とかビシビシ打ってくる。痛い。腹が立つ。

友　うん。

私　腹が立つから押し倒してやった。

友　部室か、また。

私　そう。

友　え。

私　そうなんだ。

友　ほんと。

私　部室、大学のは広いから。

友　わけわからん。

私　わけわからんよ。俺、今、四人の女としてる。

友　へ。

私　そうなんだ。かたっぱしからなんだ。

私、しゃがんで友に接近して話す。

私　楽しいことなんかないよ、ちっとも。大穴だ。ぽっかり、大穴。胸の真ん中に。女が好きだ、とか、好きでない、とかいう感覚がどんどん遠のくね。そうするとダルい。腕がしびれる。……女の頭っていうのはどうしてあ重たいかね。じっと我慢していると、ほこりが見えた。

私、部屋を静かに移動して、畳の上のほこりを見つける。

私　部室にな、道着を何枚も広げて並べるんだよ。その上でする。もちろんただでさえほこりまみれの道着だよ。それをこう、目の近くにすると、ほこりが一つ一つ浮き立つように見えた。立体写真だね。スリーディー。飛び出して見えるんだよ。大量、大粒の飛び出すほこり。ぎょぎょぎょ。声を出したよ。

友　ぎょぎょぎょ。

私　女がきいたね。「どうしたの」俺は説明できないと思った。そしたらほら、

私、畳のメを指でひっかく。

私　音だ。音が聞こえてくる。セミの声みたいだと思った。静かだ、けど頭の中でリズムをもってくる。根をおろしてしまうんだ。音は次第にはっきりしてくるようになった。音の中味も変わってきた。最近はあぶくのような水の音。

友　女と寝る度にか。

私　はじめのうちはその時だけだった。でも最近はこんな音までさ、

私、畳のメを指でひっかく。

私　水の、あぶくの音と混ざって、頭の中でグルグル、ドカドカ響くんだよ。こりゃすごいよ。

友も畳のメを指でひっかく。

私　あ。

私、畳に顔をつけて、ほこりを、じっと見つめる。

私　この、ほこりだよ。

友　……。

私　きいてくれよ。

友　え。

私　きいてくれよ。女みたいに。

友も私と同じように畳に顔をつける。

友　……「どうしたの」。

私　説明できないよ。

友　「どうしたの」。

私　いつからなのか、はっきり思い出せもしない。

友　「どうしたの」。

私　理由なんて、わからないよ。おまえのだってわからないんだから、同じだよ。

友　……。

私、身を起こす。

私　どうだ。

友　どうだ、って。

私　客観的なことさえ、さっぱりわかんないだろ。すばらしい。

友　……。

友、身を起こす。

私　剣道、弱くなったからかな。

友　……勝たなきゃ、だめだ。

私　……。

私、畳をひっかく。

私　まだしばらくいろよ。茶、飲ませてやるから。

友　……へへへ。

私　なに。

友　うれしい。

私　うれしい？

友　そう。うれしくなっちゃった、俺。

私　へ。

友　へへへ。

友、立つ。私に正対して、

友　試合しよう。真剣。俺、勝つから。一回だけでも。

私　……よし。

二人は居ずまいを正し、礼。素手の試合が始

まる。架空の竹刀が殺気を発する真剣な勝負。いくたびかの静かな緊張と激しいぶつかりあいの後、友は私の防具のないひじやすねのあたりを打ったようだ。

私　いてえ、いてえ。
友　ひじ、すね、かたあ。
私　いてえ。
友　面っ。

面打ちが決まったようだ。勝負がついたので緊張の切れた私に、なおも友は打ちかかる。

友　小手っ。胴っ。突きいっ。

不意を突かれて、ひっくり返る私。なおも友は倒れた私を滅多打ちにする。私に馬乗りになり、眉間を架空の竹刀で突こうとする友。その竹刀を手ではさんで防ぐ私。

友　覚えていてほしいんだよ、俺のこと。この前、俺、生まれた。で、なにもしないで、十九年後、死んだ。なんのためだったのかね、この世に俺がいましたよ、っていうことは。なにもしないで、こいつは死んだんだよ。こんな奴のこと、お前あと二十年もすれば、オッサンになったら忘れてしまうだろ。だれも覚えてないよ。値うちのない命。だけど俺はここにいたんだなあ。俺は、覚えていてほしいんだよ。おまえに。

私　……。
友　あいさつ、おしまい。
私　うくえーお。

私、友を跳ね返し、反撃開始。丁々発止。必死で闘う二人。
と、私の動きが止まる。目は虚ろに、なにかを探すようだ。

友　音か。
私　……。
友　あぶくか。

友、自転車にまたがる。ハンドルの持ち手の凸凹を指でひっかく。
私、強く、その指を見る。友はそれを知りつつ、あいかわらず強くひっかく。その指が止まり、

友　ここだよ。

友は喉もとを示す。突き出したのどぼとけの形は人の身体でない、異なる生物の、あるいは鉱物のようだ。
私、それにおそるおそる近づく。耳に神経を集中して、

私　音は、ここから、聞こえる。

ゆっくりと私を振り返る友。私、その目を見た。自分が怯えてしまう理由がわからない。

友　へへへ。

ふたたびのどぼとけを突き出す友。
私、耳をそばだてて聞いてみる。心が穏やかになごんでゆくようだ。暗転。

第九場　ともだちはお茶を飲む。

明るくなると、友と私は畳に転がりながらなにか、畳の上の一点を見つめている。

友　柿だよ。
私　ちがうって。
友　柿の種だよ。
私　そんなわけないって。

友　柿の木の種だよ。こいつから芽が出て根が生える。柿の木の種だよ。
私　この季節にそんなものころがってないよ。
友　でも形は柿の木の種、そのものだよ。
私　……そりゃ、そうだ。
友　……割ってみようか。
私　え。
友　割ってみようか。そうしよう。
私　どうして。
友　柿の木の種かどうか、わかるだろ。
私　わかるか。
友　わかるよ。
私　わからないよ。柿の木の種の中味ってどんなんだよ。どうなってたら柿の木の種で、どうなってなかったら柿の木の種じゃないの。知ってるのか、お前。
友　さあ。
私　なに言ってるの。
友　でも柿の木の種なら、いかにも、柿の木の種だ、って様子をしてると思う。
私　してないよ。
友　そうかなあ。
私　……取り返しがつかないぜ、割っちゃうと。
友　どうして。
私　死んじゃうだろう、もう芽を出さないだろう、柿の木の種は。
友　そうかな。死んじゃうのかな。
私　そりゃそうだろう。
友　柿の木の種はまっ二つに割られると死ぬのか。芽は出てくるんじゃないか。
私　え。
友　二つに割られたら、二つ芽を出すんじゃないか。
私　じゃ三つに割ったら三つ出てくるのか。
友　そういうわけじゃないけど。中学校の理科の教科書。断面図。
私　なに。
友　ニューッって、芽を出してる柿の木の種の断面図、あったろう。
私　うん。
友　あんな感じだよ。
私　あれは、割らない柿の木の種が芽を出しましたけれども、かりに割ってみたとしましたら、っていう図であって。
友　俺はまた、割った後ではこんなふうに芽を出しましたよ、っていう図だと思ってたけど。
私　え。
友　ちがうかなあ。
私　うーん。

二人、それを見つめる。

私　お茶の中にいれておこう。
友　どうして。
私　水が必要なんだよ。芽を出すには。
友　溺れてしまうよ。
私　だれが。
友　柿の木の種が。溺れて死んでしまう。
私　溺れるか。柿の木の種が。
友　溺れないのか。
私　溺れないだろう。柿の木の種は。
友　うーん。

二人、それを見つめる。

友　あのさあ。
私　ん。
友　これは、柿の木の種だったっけ。
私　あ。
友　やっぱりそうなんだよな、お前もそう言うんだから。
私　いや、ちがうよ。つまり、

友、立つ。

友　写真、撮ろうか。
私　え。
友　写真。記念写真。もってきてるんだぜ、カメラ。
私　うん……いやだな。
友　心霊写真とも言う。
私　だろう。
友　写ってもへんだし、写ってなくてもこわいし。
私　うん。

友、自転車籠の中からカメラを取りだし、自

転車のサドルの上にカメラを据えて、ファインダーを見る。

友　逆光じゃないようにしよう。トリックじゃないか、って思われる。

私　うん。

友　よし。

友、私とならんで、一枚、撮る。

友　もう一枚。

私　うん。

もう一枚、撮る。

友　うちの母ちゃんに送りつけといてくれる。

私　うん。

友　うちのきれいなねえちゃんにも一枚。

私　うん。

友　あと、これはおまえに。

私　……うん。

もう一枚、撮る。

友　ありがとう。

私　うん。

友　あと、これは、俺。

友、私に向けてカメラを構える。ファインダーを通して私を見る友。そのまま近づいて、私の手、足を触る。触ってゆく。

友　ちゃんと、立体に感じる、みたいだ。

私　え。

友　少しだけ。

私　……そう。

友、シャッターを押す。

友　茶、くれよ。

私　ああ。

友　新しいの。冷たいの。

私　ああ。

私、去る。

友、私の去った方向を見送った。

そして部屋を撮る。

友　柿の実はなるよ。今年は無理だけど、来年。それまで、切るなよ。死んでないんだから。幹のすみから芽を出して、大きくなって、二階の窓からおまえが女連れ込むのをみててやるよ。

友、部屋の中央に置いてある温い茶を一息に飲む。

そして、自転車にまたがり、去る。

だれもいない部屋、中央に空のコップ、カメラ。

私、戻って来る。だれもいない。部屋の中央に座りこむ。

私　ゆっくりしていけよ。

音が聞こえてきた。指で畳のメをひっかく。

強く茶を見つめる。

私　飲んでいけよ。

急に立上がり、素手の剣道を始める。架空の友は、必死でこちらに立ち向かってくるのだ。

お終い。